

近世京都質屋仲間

藤田貞一郎

目次

一、解

題

二、史

料

一、解

題

ここに紹介する史料はいずれも、同志社大学図書館に現蔵されているものである。昭和二十三年、外部より何らかの経路を通して購入され、図書館に所蔵されることになったものらしい。原蔵者は、京都質屋貳拾組の中のひとつである老松組の八幡屋弥兵衛か近江屋吉兵衛であったと思われる。もっとも、この判断は現存史料の内容

からする紹介者の推測にすぎない。史料の伝来経路が右のような次第であり、今の所、確たることは云えない。

史料は七点あるが、内容に従ってわけると、以下の五類になる。(一)「質屋元惣仲ケ間廿組仲ケ間立奉願候規定一同連印写書」(安政四巳年閏五月)(二)「規定連名書」・「一統連名調印」(慶応二丙寅年六月)(三)「慶応三丁卯年正月質仲間舊記并利足歩上明細録」・「質屋取締并ニ利足歩上ケ録」(四)「乍御内々奉願口上書」(明治元年と判断する)(五)「永代式目録下書」(年次不明なるも、安政四年頃から慶応二年頃までのものと判断する)。

(二)の「一統連名調印」は「規定連名書」に付けられる連名書であり、(三)の「質屋取締并ニ利足歩上ケ録」は

「慶応三丁卯年正月質仲間舊記并利足歩上明細録」のうちの「質物利足歩上一件之事」と「質物利足諸方聞合覚」それに四通の来信文書を除いてはほとんど全く同文である。(五)の「永代式目録下書」は、質屋仲間の意にそった株仲間再興がなるものと予想して作成したものらしい。が史実の示すように、これは実現されることがなかった。とはいえ、当時の状況を推測する手掛りとしては、十分役に立つ。

従来近世京都質屋仲間に関する史料としては、『京都御役所向大概覚書』に所載のものが知られていた。京都市編『京都の歴史5 近世の展開』（昭和四十七年、学芸書林）も、京都質屋仲間についての叙述は主として、この『京都御役所向大概覚書』に基づいている。だが、岩生成一監修『京都御役所向大概覚書上・下巻』（昭和四十八年、清文堂）の解題が、この史料は「享保二年中に一応の形でまとめられ、享保三年以降に部分的な修補、加筆などの操作が行なわれ、完成をみたものと推定できる」と

いうことからわかるように、近世中・後期の史料はこれを全く欠いている。他方、昭和四十年に設立された京都市史編さん所の史料発掘作業においても、京都質屋仲間に関する史料は発掘されていない。ために、近世中・後期の京都質屋仲間については、ほとんど明らかになっていない。

そうした研究状況に鑑みる時、ここに紹介する史料は極めて有用なものと思われる。事実の検証すら行われていない現状を考える時、こちたき理屈を述べるよりも史実を明らかにすることが先決問題であろう。冗長をいわず史料を紹介する所以である。

商慣習の実態のひとつを示すものとして、「慶応三丁卯年正月質仲間舊記并利足歩上明細録」に所載の史料はなか／＼面白いものがある。京都質屋仲間の推移には、何にもまして興味深いものが窺われる。既に知られているように、京都では、元禄十二年（二六九九）に質仲間惣代会所がはじめて設けられる。ところが、その後、宝永五

年（一七〇八）市中大火を機会に、この質仲間惣代会所は「取解」になる。だが、「一体不取締」ということで、「京質屋」は、奉行所に質屋仲間取建を願う。そして、享保十七年（一七三二）、「糸割符難渋為助成」のためという、質屋仲間に見れば全く理解に苦しむ「因縁」に基づき、糸割符年番三宅寿圓、津田勘兵衛の両名を「質物改役」として質仲間改会所が再興される。この質仲間改会所は天保十三年（一八四二）の株仲間解散令により「取解」になるまで続く。その後、嘉永六丑年（一八五三）の京都における問屋組合再興の動きに則して（京都で問屋組合再興が触れたのが、大阪などに比べて二年後れていることの意味するものは何か、ということについては本誌巻頭の安岡論文を参照せよ）、安政四年（一八五七）に仲間再興の動きが質屋一統から具体的に起きて来る。しかし、享保十七年から天保十三年までの間に築き上げられてしまった利害状況が障害となつて、仲間再興とはならなかった。質屋仲間の願が叶つて仲間再興となつたの

は「御一新」の明治元年（一八六八）のことであつた。こうした状況の中、幕末期に、質屋仲間の再興、あるいは利足歩上げに質屋一統の中心人物、「発起取調人」（「質屋取締利足歩上ケ録」の表現）として奔走したのが、八幡屋弥兵衛であつた。そこに、この一連の史料が集成されることになつたと思われる。

史実の位置付けはさておくとして、警察的取締りの必要から早くから株仲間になる例としてしばしば取り上げられる質屋仲間の一例、京都質屋仲間の歴史を語る、この一連の史料は、近世の京都に関する様々な材料を提供していることは間違いない。

（一九七五年五月九日）

二、史料

（一）「質屋元惣仲間廿組仲間立奉願候規定一同連印写書」（表紙）

一質仲間御取解已来追々取引取乱、不取締ニ付迷惑仕候

廉人多、旧業之者難立行候付、今般相談之上已前ニ不拘質屋一同之存意通仲ケ間奉願上度候ニ付、元仲ケ間廿組行事老分共再度集會評儀一決いたし候付、当廿組之旧業之者勿論、御取解後新規渡世候者、其組内へ加入の方へ逸々押引いたし承知之上、已来違変無之様為後證銘と一致規定調印いたし、惣仲ケ間江取之置可申様示談相整ヒ候ニ付、則旧業新業共者其組内限ニ而取調、別紙規定調印いたし候儀ニ御座候。此後若相違之儀も在之候ハハ行事并惣代之者共之越度ニ付其当人者組内を除、右役前之者急速退役為致可申様急度取計可申候。尤願書者粗別紙之通ニ御座候得共時宜ニ寄文面差略相成候而も可然候。依之相互ニ規定申候處如件。

但萬端規定之通ニ相違無御座候。其組内之内若品替リ等在之候ハ、月行更江早速相届可申候。尤品替之訳合明委ニ書記月行事方へ可申候事。

安政四巳年

閏五月

乍恐奉願候口上書

一私共儀元質渡世仕罷在候者ニ而元錄十二卯年十二月(マツ)中質屋惣代会所御取立、質屋之内四人之者へ初而被仰付、則油小路二条下ル町ニ而取建御用相勤罷在候處、其後御取解品替ニ而、尚又質仲ケ間同改會所等御取立之上明和七寅年質屋株五百五拾軒ニ御定被成下、洛中洛外續ニ而仲ケ間廿組西岡村とニ而五組と相分、前と為仰渡候御定法之趣相守渡世相續仕難有仕合ニ奉存候。然ル処、去ル天保十三寅年諸問屋仲ケ間御取解被仰出、其節質會所因縁相離、翌卯年質物之儀都而元錄度之振合ニ而正路之取引可仕旨御触流御座候付、旧業之者御定法相守取引仕候得共、右御取解後追々素人者新規質屋渡世相始メ、或者表向質屋ニ而も無之内分勝手尽ニ質物預リ且賣上買切杯と限月勝手尽

ニ取究質物取居候もの数多在之、逸々御定法相背候儀
 なから我尽手輕之取引出來候付、右新規心易方へ質物
 持參仕、且又近來諸御名目御貸附所ニ而衣類其外質品
 引宛ニ而専ラ金銀御貸附ニ相成、旁以旧業之質屋向衰
 微および、無余儀休業仕相續難出來深心配罷在候處、去
 ル丑年諸問屋仲間格別之御仁恵を以御冥加連上銀等
 御差免難有御趣意ニ而御再與被為 仰出、其後質仲ケ
 間其外共追而御沙汰可被成下旨結講之御触流御座候
 付、質仲ケ間之儀も御沙汰可被成下御儀与奉存候得共、
 前文之次第ニ而旧業之質屋向追々衰微仕、既ニ先前東
 西

御役所様へ質屋中組とへ拝借被為 仰付候御下ケ金銀
 高之内銘と奉分借候内、渡世筋衰微難渋仕右金銀之内
 当時金四百拾貳兩三分毫朱銀七貫八百五拾四匁三分毫
 厘皆無取立難來候付、無余儀其向寄組合中へ御利足弁
 納仕罷在候儀等押移、一体之風儀ニ拘り此上迷惑相嵩
 候而者自然御金銀返納御利足上納方等ニ差支候様成行

奉恐入候。且又會所御取解已來御吟味之品ニ者町とへ
 御触流御座候付、似寄之品在之候ハハ御役所様江直々
 奉窺候儀ニ御座候得共、近來御聞合せ触等多再御吟味
 之節嚴敷被 仰付、旧業質屋之者者無他事取調候得共、
 右御名目御貸附所并新規自修ニ質物取居候もの坏へ者
 委く御達ニ相成不申候哉ニも粗相心得、自然右之内ニ
 似寄之品取居候儀等御座候而者御便利惡敷御差支ニ相
 成候御儀と乍恐奉存、旁以不取締迷惑仕候間、恐多御
 儀ニ奉存候得共諸仲間同様現在之姿ニ而今般質仲ケ間
 御取立、都而元禄度之振合を以被為仰付、諸御名目御
 貸附所ニ而質品御取扱并素人者猥ニ質物取引不仕様被
 為 仰付被下候様奉願上候。尤御吟味筋御触書達方其
 外御用之儀者質屋之内慥成者為惣代四五人相極、元禄
 度振合通 御役所近辺へ出張仕、日々御用奉窺以前之
 通洛中洛外ニ而仲ケ間廿組西岡村とニ而五組と相分、
 一組ニ行事之者老人宛相極、御触書達方都而御用御差
 支ニ不相成様惣代之者も直々相勸申度奉存候。尤質會

所御取立之儀者強而奉願存心無御座候。前書奉申上候

通此俥取締方無御座候而者勝手俥之取引弥以增長仕、

御吟味筋御用便并御下ケ金銀等之御差支ニ相成、質屋

之者一同難立行昼夜心痛仕罷在候間、何卒前段之始末

御賢察被成下格別之御憐愍を以、願之通被為 仰付被

下(候ハ脱力) 如何計難有仕合ニ奉存候。右ニ付、旧業新業共

最寄ニ而取調名前帳差上置、品替り之儀者惣代并行事

ヲ御届申上候様可仕候。依之元仲間廿組并西岡村と五

組質屋之者共一同連印を以此段奉願上候。以上。

質屋渡世元仲間廿組

質屋 一同 連印

西岡村と五組

質屋 一同 連印

規定名前書

元蛭子組

質仲間御取立之儀付先達而メ元惣仲間之者種と示談之

上、今般廿組年行事惣代連印を以奉出願候付而者旧業新

業共取調候儀ニ御座候。然ル上者此後新加入之方右御願

濟被成下候迄一切取敢申間敷候。且諸入用其外懸り物割

付銀等聊無遲滯出銀可申候。自然右出銀不仕候敷又者一

己之存寄專彼是申立候ハ、御取調之上連印之内急度御

除如何躰御取計被下候共相互ニ一言之申分無之候。依而

連印左之通。

(以下各組毎に同文の規定名前書の前書を繰返した後に各組毎

の連印が記録される。そこで、以後は右の文を省略して、紙面

の都合上、連印の部分のみ以下の如く表示する。なお、表示上

の約束は左の通り。

(イ) ㊦は年行事を示す。

(ロ) A欄は「右者旧業之分」と示されたもの。

(ハ) B欄は「右者新業去ル子年名前書差上置候分」と示されたもの。

(ニ) C欄は「右者新業名前書差上候後渡世仕候分」と示されたもの。

(ホ) B欄・C欄を欠いている場合は、それぞれに該当する業者がないことを意味している。

元蛭子組 (家数合 38軒)

[illegible]

注) 史料の記載では19軒となっている。ために総合計も37軒となるが、いづれにしても不注意による過ちかも知れない。

29軒)

A			B			C		
名	前	住 所	名	前	住 所	名	前	住 所
菱 中村 屋	助衛門衛	五条通鳥丸東入町	池田屋	衛衛助	佛具屋町通松原上ル町	大坂屋	き助衛	五条通室町西入町
錢 中村 屋	左衛門衛	油小路通松原上ル町	久 兵 衛	松原通鳥丸東入町	大和屋	之 兵 衛	室町通五条下ル町	
江 近江 屋	藤与吉市	新建仁寺町	源 次 郎	松原通鳥丸西入町	池田屋	市 武 衛	室町通五条下ル町	
柏 麥 津 屋	衛名衛衛	五条通室町西入町	帶 銀 次	松原通鳥丸西入町	近江屋	清 岩 次 郎	室町通五条下ル町	
錢 國 屋	新々勘武兵	不明門通松原下ル町			山城屋	三 三 郎	室町通五条下ル町	
蛙 子 屋	政之衛衛	高辻通鳥丸西入町			萬井屋		室町通五条下ル町	
菱 山崎屋	政之衛門つ衛衛門吉門	醒ヶ井通松原上ル町					室町通五条下ル町	
山 杉村屋	政之衛門つ衛衛門吉門	醒ヶ井通万寿寺上ル町					室町通五条下ル町	
河 龜内屋	政之衛門つ衛衛門吉門	油小路通松原上ル町					室町通五条下ル町	
藤 池田屋	政之衛門つ衛衛門吉門	堀川通綾小路下ル町					室町通五条下ル町	
菱 屋屋	政之衛門つ衛衛門吉門	堀川通綾小路下ル町					室町通五条下ル町	
合 計	18軒		合 計	4軒	合 計	7軒		

元 大 黒 組 (家数合 19軒)

A			B			C		
名	前	住 所	名	前	住 所	名	前	住 所
④小田原屋弥右衛門	東寺内上之口下寺町東入町	同上	大黒屋	喜市	高倉通五条下ル町	山崎屋	安徳弥彦市兵衛	五条通鳥丸西入町
菱屋与市	東伊勢馬場七条上ル町	同上	金田屋	佐郎	空町通五条上ル町	大北村屋	兵兵	油小路通新町東入町
近江屋	同上	珠敷屋間之町	美濃屋	兵衛(市)	五条通西洞院西入町	福嶋屋	兵兵	七条通新町西入町
本屋	五条下ル町	同上	佐郎	兵衛(市)	〃	方東屋	七衛八衛	室町寺通鳥丸西入町
柏文字屋	通角上ル町	同上	合 計					方東寺通鳥丸西入町
大井屋	通魚柳上ル町	同上						西洞院通五条上ル町
福井屋	通鳥丸東入町	同上						新町西洞院通五条下ル町
合 計	7 軒		合 計	4 軒		合 計	8 軒	

注) (i) 勘兵衛事 (ii) りう跡

元 初 寅 組 (家数合 26軒)

A			名	前	住 所
名	前	住 所	名	前	住 所
④大文字屋	伊右衛門	高倉松原上ル町	近江屋	万右衛門	松原下ル町
城殿屋	健仁寺町五上ル町	石川屋	万市忠兵八衛郎	越屋松原下ル町	雪路屋松原上ル町
津近江屋	問屋町正面上ル町	大 鍵 銭 市	傳又や勝平右衛門	雪路屋町五上ル町	御幸町五上ル町
三小菱	柳馬場	越屋町公光寺下ル町		佛光寺通高倉上ル町	東柳馬場公光寺上ル町
文 字 屋	越屋町公光寺上ル町	雪小路高倉下ル町		烏丸条通高倉上ル町	東入町
小 文 字 屋	雪小路高倉下ル町	不問門通五条下ル町		雪路屋町新町東入町	
大 文 字 屋	伊右衛門				
合 計	7 軒				

注) (i) 丁油屋市兵衛儀 安政四巳年閏五月中渡世相止組内相除申候事」とある。したがって合計は26軒となる。

[illegible]

104

元 養 老 組 (家数合 26軒)

[illegible]

元 畏 沙 門 組 (家数合 14軒)

A			B			C		
名	前	住 所	名	前	住 所	名	前	住 所
伊勢屋 龜山崎	理六右衛門 かす	新島丸二条上ル町 河原町丸太町上ル町 新植木町丸太町下ル町	錢屋 永栄屋	武助 の	二条河原町東入町 新植木町丸太町下ル町	三嶋屋 萬足屋 天兵衛 大文字屋	忠兵衛 多兵衛 嘉徳理	御幸町二条上ル町 寺町馬場寺町西入町 丸太町二条下ル町 堺池東洞院東入町
塩方 屋	勘右衛門 兵衛	木屋町四条上ル町 木屋町三条下ル町 目富小路二条下ル町	合 計	2 軒		合 計	6 軒	
釜 合 計	蔵 6 軒							

元 住 吉 組 (家数合 19軒)

A			B			C		
名	前	住 所	名	前	住 所	名	前	住 所
松屋 菱波屋 丹波屋 丹波屋 橋坂	新六兵衛 九兵衛 大和兵衛 利又兵衛 伊	鷹ヶ峰光悦町 西北野西今小路町 一条通黒門西入町 紫竹海道 千本釈迦堂前 元誓願寺通七本松東入町	松屋 平野屋 利之清 平野屋 大文字屋 大文字屋	衛う七助 兵衛 丈兵衛 平右衛門	鷹ヶ峰光悦町 五辻通千本東入町 中筋大宮西入町 知恵光院通五辻下ル町 知恵光院通今出川下ル町 中筋通知恵光院東入町	儀 屋 治 三 郎		元誓願寺通黒門東入町
合 計	8 軒		七文字屋 喜兵衛 橋屋 合 計	10軒	知恵光院通上立売下ル町 往屋町浄福寺東入町	合 計	1 軒	

106

[illegible]

元 富士 組 (家数合 20軒)

A				B			C		
名	前	住	所	名	前	住	所	名	前
富田屋	長政 兵之 衛助	日暮通丸太町下ル町西	下入町	菱屋	善右衛門 (i)	出水通千本東入町	財木屋	善治 五郎 兵衛七	一条通浄福寺西入町
津国屋	勘宗 助七 衛門	日暮通堀川西入町東	下入町				伏見屋		出水通松屋町東入町
松伏菱	惣治 兵衛 衛門	日暮通大宮西入町西	下入町				二文字屋		下立荒通大宮東入町
菱屋	惣治 兵衛 衛門	下立荒通堀川西入町	下入町						
津国屋	宗清 兵衛 助	下立荒通堀川西入町	下入町						
伏見屋	半儀 三郎 助	下立荒通堀川西入町	下入町						
藤伏見屋	半儀 三郎 助	下立荒通堀川西入町	下入町						
津国屋	勘宗 助七 衛門	下立荒通堀川西入町	下入町						
伊勢屋	武清 助七 衛門	下立荒通堀川西入町	下入町						
丸	武清 助七 衛門	下立荒通堀川西入町	下入町						
檜皮屋	太兵衛 衛門	下立荒通堀川西入町	下入町						
合 計	16軒			合 計	1軒		合 計	3軒	

注) (i) 久四郎事

[illegible]

元 高 砂 組 (家数合 18軒)

A			B		C	
名	前	住 所	名	住 所	名	住 所
⑨木加賀屋	久茂庄	寺町通今出川上ル町	丸 屋	升形出町西入貳町目	升大坂屋	今出川原堤柳村
布 屋	郎兵衛門	梨町通今出川上ル町			仁清次重五	東入町
布 屋	勘 助	塔鞍馬口寺町東入壹町			衛郎助郎衛	西入町
嶋 屋	龜次郎	目 同 通寺跡今出川上				
紫竹葉屋	与三兵衛	東立本町目 出川上ル町				
松黒屋	榮次郎	荒神口通河原町西入町				
大近江屋	孫右衛門	衣棚通丸太町今出川上				
金 合 計	七右衛門	東立本町目	合 計 1 軒		合 計 5 軒	

110

A			B			C		
名	前	住 所	名	前	住 所	名	前	住 所
油井簡屋	兵衛門 庄長右衛門	七条通高瀬川東ノ宮町 西入町	紅屋	三郎 門作助衛衛郎衛助	西高瀬 七条通高瀬川西入町 西入町	近江屋	兵衛八助	辯町正面下ル町 五条通東中筋西入町 二丁目
鍵屋	文次郎	大仏正面東ノ角 西松原通健仁寺東入町	内村屋	左衛門次之兵衛三兵衛	七条通高瀬川西入町 西入町	河内屋	源仙新治	
大和屋	勘新兵衛助	下ル町東ノ角 五通健仁寺西入町	長茂作已要嘉又柳市慶		七条通高瀬川西入町 西入町	具足屋		
近江屋	半市字伊喜衛衛市郎郎	公卿通中之町 同伏見街鐘鐺街五通健仁寺西入町	伊勢屋		七条通高瀬川西入町 西入町			
伊勢屋	伊喜衛衛市郎郎	伏見佛下高瀬川五通健仁寺西入町	錢達伊備		七条通高瀬川西入町 西入町			
麥國津	萬吉	大森東間屋五通健仁寺西入町			七条通高瀬川西入町 西入町			
屋屋屋	又傳佐か清し孫金儀三郎	目黒通上ノ町 大森東間屋五通健仁寺西入町			七条通高瀬川西入町 西入町			
屋屋屋	七助の郎り衛藏郎	三西伏建仁寺町五条上ル町			七条通高瀬川西入町 西入町			
大美伊丹波屋	三兵衛	三西伏建仁寺町五条上ル町			七条通高瀬川西入町 西入町			
伊丹波屋	儀三郎	三西伏建仁寺町五条上ル町			七条通高瀬川西入町 西入町			
河内屋		三西伏建仁寺町五条上ル町			七条通高瀬川西入町 西入町			
紀伊屋		三西伏建仁寺町五条上ル町			七条通高瀬川西入町 西入町			
丹波屋		三西伏建仁寺町五条上ル町			七条通高瀬川西入町 西入町			
合 計	伊三郎 22軒		合 計	11軒		合 計	4軒	

元 青 陽 組 (家数合 41軒)

A				B				C			
名	前	住	所	名	前	住	所	名	前	住	所
吉文字屋	甚兵衛	千本通今出川上ル上	上	菱一文字屋	長兵衛	西陣西猪熊北半町	上	越後屋	半儀	寺之内通大宮東入町	大宮通聖天町
井丸越後	庄き弥	大宮通五辻上ル上	上	丹波屋	兵衛	千本通今出川上ル上	上	布和久屋	兵衛	寺之内通大宮東入町	大宮通聖天町
堀屋	衛七	堀上立売通大宮西入町	堀	升木	衛	善寺之内通中猪熊町	上	藤茂	助衛	西陣出川知恵光院西入	今出川知恵光院西入
越木	衛	屋小川通上立売上ル上	上	中	利三郎	浄知恵光院通五辻下ル	上	三郎右衛門	助	今出川通一条上ル上	今出川通一条上ル上
能勢屋	利善兵衛	西陣藤之木町	寺	市	衛	五辻通大宮西入町	上	屋小	衛	今出川通知恵光院東	今出川通知恵光院東
炭丹波	衛	上陣天神之内下ル	西	菱大文字屋	德弥	菱大文字屋	伊新治	伊新治	衛	大今出川通大宮東入	大今出川通大宮東入
桜井屋	善七	西大伊佐町	入	紙布松	衛	紙布松	衛	紙布松	衛	大今出川通大宮東入	大今出川通大宮東入
布菱	衛	五辻通知恵光院西入	入	合 計	7軒			合 計	13軒		
菱屋	久左衛門	寺東堀川通今出川下ル	西								
菱屋	吉右衛門	今出川通知恵光院西	入								
三軒屋	吉く	今出川通大宮西入町	入								
菊松木	ち衛衛	今出川通七本松東入町	入								
大和屋	九郎兵衛	五辻通一条上ル上	上								
合 計	21軒	大徳寺境内二股川端	端								

図主圖風繪松井氏

(右に表示した連名の次に、「元貳拾組之惣家數合五百三拾軒」として各組の内別を記載する。次いで、左記の記載あり。)

前書之通元仲間式拾組と名前取調一同規定連印仕候處相違無御座候。右者惣仲間一駄之為方ニ付得其意一同承知一致罷在候。尤右御願濟相成候迄新加入在之候共取敢申間敷候。然ル上者向後右連印之内違乱妨罷申立候ハ、其組之内相除殘連印之者も可及出願候。為念年行惣代一同連印仕候處依而如件。

安政四巳年閏五月

元養老組

年行事

富山屋 新兵衛 印

惣代

越後屋 甚 蔵 印

(以下、十九年組行事、惣代がそれぞれ連名連印なるも省略す。これに次いで「西岡元質屋渡世之者三拾四人名前左之通り」とて、次の頁に表示する名前が示される。)

(二)「規定連名書」・「統連名調印」

規定連名書

一近來諸色高價ニ而銘と相續取凌難出来候ニ付、質屋一統深心痛仕、元式拾組年行事老分段と示談仕、何卒質物利足歩増之義御歎願奉申上度候得共、容易ニ者御取上ケ之程も御坐有間敷御儀与奉存、大坂表振合之義深心配問合候處、月式歩と三步迄ニ而、金銀高其品柄ニ應シ以相對取引罷在候由ニ付、右大坂表同様ニ質物利足歩増之義元式拾組年行事組と惣代以連印西御役所様江昨丑十一月四日ニ御歎願奉申上候處、段と御調被遊、則大坂御役所様江御問合ニ相成、種と御尊配被為成下候御儀之程者何共、難申上盡、当寅六月十日惣代之者并ニ町役人共御召出、右願之通質物利足月式歩と三步迄以利足、其品柄ニ應シ正路ニ相對致シ取引可仕様、格別結構ニ御憐愍御聞濟之上、市中一圓江御触流被為成下、以御蔭相續取凌も相立、誠ニ以一同難有仕合ニ奉存候。然ル處取引方利足割合之儀是

西岡元質屋渡世者 (家数合 34軒)

名前	支配	住所
井筒屋 善右衛門	桂御所御領	城笠葛野郡川勝寺村
質屋 庄右衛門	小堀勝太郎殿御支配所	〃 郡村
河内屋 治兵衛	知恩院宮御領	〃 片木原村
河内屋 善治郎	〃	〃
質屋 嘉右衛門	勧修寺殿御領	同笠乙訓郡大原野村
松木屋 重兵衛	小堀勝太郎殿御支配所	〃 長野新田村
藤屋 勘右衛門	東福寺領	同笠紀伊郡横大路村
輪屋 四郎右衛門	今出川殿御領	〃 下鳥羽村
鍵屋 久右衛門	御室御所御領	〃 竹田村
萬屋 三郎兵衛	小堀勝太郎殿御支配所	〃 上鳥羽村
銭屋 浅右衛門	〃	〃
木屋 定八	〃	〃
清五郎	山科昆沙門堂御領	〃
丹波屋 伊兵衛	花山院殿御領	同笠葛野郡朱雀村
井筒屋 勘右衛門	山科昆沙門堂御領	同笠紀伊郡上鳥羽村
質屋 小右衛門	竹御所御領	同笠乙訓郡上久世村
質屋 甚右衛門	□□殿御領	〃 西土川村
質屋 徳兵衛	松梅院御領	〃 大藪村
質屋 五三郎	妙法院宮御領	〃 寺戸村
八幡屋 市兵衛	桂御所御領	〃 開田村
油屋 三郎兵衛	小堀勝太郎殿御支配所	〃 神足村
萬屋 与五郎	今出川殿御領	〃 下植野村
そば屋 藤蔵	八幡宮御神領	〃 大山崎庄
藤屋 久蔵	小堀勝太郎殿御支配所	〃 長法寺村
糍屋 作右衛門	〃	〃 友岡村
鶏冠井 太右衛門	六条殿御領	〃 鶏冠井村之内向日町
岡崎屋 治兵衛	大佛宮御領	〃 寺戸村
質屋 佐兵衛	〃	〃
木屋 太三郎	下嵯峨天龍寺領	同笠葛野郡下嵯峨法界門町
藤屋 太郎右衛門	天龍塔頭鹿王院領	〃 上嵯峨鳥居本町
富田屋 六兵衛	阿野殿御領	〃 下嵯峨川端村中之町
木屋 和助	〃	〃
角屋 徳兵衛	太秦廣隆寺領	〃
質屋 六之進	有栖川宮御領	〃 大石村
合計 34軒		

亦惣代一統申談之上

近江屋 吉兵衛

御役所様江御窺奉申上、別紙書附之通割合ヲ以正路ニ

惣代

取引可仕候様御聞濟被成下候ニ付、右利足割合定書家

八幡屋 弥兵衛

別ニ御渡被下、依之右割合之利足を以正路ニ取引可仕

候。則別紙ニ御歎願書并ニ訳書等御坐候次第柄ニ而、

慶応二丙寅年
六月

旧業之者共為取凌御役所様格別御尊配被成下候御儀ニ

御座候間、右割合之利足より糴取引等之儀一切致間敷

候。并ニ銘々勝手を以、質屋方ニ取組有之候質物、置

主と相對を以置替等致候義者、是亦決而致間敷候付、

自然心得違致し候もの之候得者、大仲一統評儀之上

其次第柄ニ寄、大仲相除キ可申候。右ヶ条之趣相互之

義ニ御座候間、堅ク相守慎敷渡世相續可仕候。依之為

後證一統連印仍而如件。

右之趣組内一統江右書附相渡、篤与為申間、箇条之趣

急度為相守可申候。自然心得違之者有之候得者、行事

老分落度たるべく候。仍之與書如件。

老松組年行事

〔一統連名調印〕には「前文ヶ條之趣御談被下一統承知仕、俱
「連印を以可奉願上等之處、多人数罷出候儀者奉恐入候付、惣
代を以追々御願立被成下候段忝奉存候。依之一統連印如件」と
の前書のあとに各町毎に「年寄」と「五人組」の肩書を付けた
人物がそれぞれ一名づつ連名連印している。但し、「年寄欠」の
場合は「五人組」肩書の人物が二名連名連印している。以下、
人名、町名とも省略する。町名は、東は堀川通、西は神泉苑町
通、北は御池通、南は松原通にかこまれた地域の八十町に及ん
でいる。）

〔二〕「慶応三丁卯年正月質仲間舊記并利足歩上明細録」

表紙）「質屋式拾組」（裏表紙）

御定法之事

一 質屋取置事

右質屋之札、双方之交名有所を附諸人讀候様ニ可書附、
不讀様ニ札附候事堅令停止早。盜物取置吏先規之制法
也。所詮質物之價不定高下故也。自今以後諸質物之價
以三步二を質主江可相渡、三步一者質屋之可為利觸、
又利足之事ハ可為相對、如斯相究上者妄ニ下直之質物
不可取置、若シ盜物質物於取置者質屋可處重科事。

元和八年戊八月廿日

周防守

一 質屋中諸道具質ニ取候時、置者之町所宿主をも能可聞
届、難渋仕名宿を於不申者留置奉行所江可申来、慥ニ
名乗候ハ、則人を副、宿を見届ケ置質可取事。

寛永六年巳十月十八日

周防守

質仲ケ間惣代會所訳柄之事

一 質仲ケ間惣代會所之儀元錄^(カ)十二年十二月廿五日質屋
之内左之四人^(カ)之もの江初而被仰附候節御触書之写。

堀川通御池上ル町

藤屋 六兵衛

河原町通三条下ル町

大和屋 源兵衛

新町通三条下ル町

高嶋屋 六兵衛

駄屋町通三条下ル町

山田屋 勘右衛門

右四人此度質屋惣代申附候条、取扱之儀其外尋物等来ル
辰二月より可相改候間、洛中洛外質屋共此旨相心得油小
路二条下ル町質屋惣代會所江罷越質看板取之向寄次第組
合胡乱成質物一切不取候様相互ニ可遂吟味、質直段并月
切亦者惣代方江出銀之儀者追而可相究旨、洛中洛外質屋
共江可令触知もの也。

西 信濃

元錄^(カ)十二年卯十二月廿五日

東 駿河

一 旧蠟相触候通今般質屋惣代申附候質取候もの来ル廿七
日ヨ来月五日迄之内油小路二条下ル町質會所江罷越根

帳江附可申候。於不參者可為越度候事。

元錄十三年辰五月＊（マ）

＊（「質屋取締并利足歩上ケ録」では正月…注）

一諸物價之儀前と相定候通可相守候。勿論下直ニ質物不可取事。

一諸質物月切ニ相對次第たるへく事。

但シ十二月迄利足不出置主江相斷其質物可賣拂もの也。

一諸質物置主請人念之入相改胡乱成質物不可取候。置主不相應質物持參節者念之入慥成訳ケ聞届候上取之へく、勿論請人無之質物一切不可取もの也。

一質請狀之儀能と令吟味可取置候。勿論受人相果候敷他国江罷越候半者、早速受取直シ可申候事。

一洛中洛外向寄次第質屋拾人亦者拾四五人程宛組と合相互ニ胡乱成質物不取様ニ可申合候。尋物有之節も早速組中可相通事。

一盜物失もの等在之色品相触候已後質物持參候ハ、其

ものを留メ置惣代江可相知支。

一盜物質物ニ取置候ハ、可為越度候。

但シ慥成請人有之盜物等不存分相立候ハ、吟味之

上可用捨候事。

一質屋仕候もの惣代より質看板取之拾ケ年ニ忝度宛改可取置候事。

右之通急度可相守旨洛中洛外江質屋共江可相触もの也。

元錄十三年辰正月

西 信 濃

東 駿 河

前書之通被仰渡御用向相勤来候。然ル處宝永五子年市中大火有之、其節質仲ケ間惣代會所御取解ニ相成候ニ付、御吟味もの、義者町中へ御触流御坐候事。

一諸質物置主并請人念入可取之旨先達而相触候処、質物置主を相究今以質請證人取置質物取候由相聞不届成る仕形候。向後置主極取候義并置證文取候事急度止更可申候事。

一質置主忝人忝人宛取之質物持參之節者入念之慥成

訳聞届ケ、胡乱成義無之おゐてハ可取之事。

一送り質物之儀弥令停止候事。

右之条々洛中洛外へ可相触者也。

宝永七年寅五月廿九日

右之御触ニ付置主者不及申質屋共難儀仕候故、組々
寄合談合仕候。六月四日組中御訴訟ニ出申處 御
前之首尾不宜候様ニ相聞候ゆへ、諸方之質屋中御願
止申候。河西組三条組二条組同五日御窺罷出候處、
質物持度毎ニ請判取申候様被為 仰付候。只今迄之
通證文取ニ不及候よし承届候。依之此方組中上邊之
質屋衆加り被申六月九日竹屋町明善寺おゐて寄合申
極置候条々。

定

一此度被為 仰出質物之儀御触ニ付、度毎ニ置主受人印
形取質物可申事。

一今迄老人ツ、置主肝煎質取申義在之候得共向後色品持
参相改別ニ請人取之可申事。

一入替質物義堅仕間敷候。併当分着用日切返濟之義承届
候ハ、間ニ合可遣候。尤替もの請人印形無之質物致
間敷事。

一月定之儀十二ヶ月限之外相對無用之事。

一利足義高下共月ニ式步宛、荒道具類式步半ニ相定可申
候事。

右之通互ニ申合候上者急度相守可申候。万一違背之方於
有之者、品ニ寄御訴可申候。為其仲ケ間相定也。

享保四年亥六月

向寄組々

行事

一送り質物之儀質屋之勝手ニ相好ミ候由ニ相聞候得共、
是者前より堅申附置候通、送り先ニ而其質物火事盜難
ニ合候節ハ送り質屋共置主江訳面相立申間敷候
間、弥以送質物無用たるへく、然共置主請人共江も其
訳を申聞セ相對之上後日之無違乱様之證文為取替送り
之義相對無之送質物者堅可為無用。尤送り質屋送受候
質屋共一統不屈たるへく、右之通向後堅不相守已来廬

末不念之諸行在之ニおいて者、急度遂吟味其咎申附も
の也。

右之通

享保十四年御触書御座候間、送り質物置主ニ不相届
勝手俵ニ質物取引いたし候義堅仕間敷候事。

一質物取方之儀前ニ御定法之通纔之質物ニ而も置主請人
印形持参同道罷越不申候半而者質物取申間敷咎之処、
何分身薄日稼之ものニ而遠方へ罷越火急金銀錢入用之
節而印揃兼候ニ付、質置主とも身薄之者共ニ而日用融
通合甚差支難洪仕并質屋共も種々差支罷在、無餘儀一
統申談之上度ニ御歎願奉申上候得共、何分前ニ急度
御触御定法之趣御座候ニ付容易ニ御取上ケも無御坐候
処、猶不恐願御願奉申上候之処、格別之以御憐愍左之
通被仰渡候。

一、質屋共より度々種々申立願書差出候得共、前ニ急
度相触候条々在之願不取上候。然共質物之儀輕キ置主
共金銀錢等ニ借用難相整令難儀候由相聞候ニ付、今度

触書差出候旨被仰渡、則左之通御触流被成下候。

一近年纔之質物ニ而も其時ニ置主請人證文取之候義質屋
共不勝手者勿論置主受人等も及難儀候由粗相聞候。向
後者質物證文十二ヶ月限相改質物取可申候。尤十二ヶ
月切之内たりとも死失又者他国ニ参り其外品変候儀有
之候ハ、早速證文取直し可申候。併金式拾両又者銀
壹貫目余之質物者是迄之通其時ニ置主請人相改手形取
之可申候。惣而諸質物置主不相應成ものニ候ハ、別
而念入胡乱成る義も無之受人慥成上者可取之、其段常
ニ入念可申候事。

享保十四年酉二月

右之通御触流御座候ニ付、置主受人證文取之質物取
引仕来、然ル処寛政三亥年五月亦左之通御触流御座
候。

一都而質屋共質物取方之儀纔之質物ニ而も其時ニ置主
請人證文候而者不勝手ニ付双方及難儀候由、金式拾兩
銀壹貫目已下之分初發質請證文差遣十二ヶ月限相改候

様享保十四酉年相触候得共、質物差懸候度と請人江も不相斷置主より質屋共直と及對談候而、受人乍有之右貨品不存質印鑑猥ニ貸借等致し毎事不正之筋出来候間、向後右金銀高以下たり共其度と置主請人兩人罷越證文差出候ハ、質物可取之、忝人にて印形式ツ持參致し置主請人と名乗候共、質品請取申間敷候。且吳服屋ものと相見へ紙付之類并ニ端物惣而不相應之品持參候族在之候ハ、其先と得与遂吟味其上置主請人慥成ニ候ハ、可取之候。

右之趣今度相改質屋共江申渡置候間、洛中洛外裏借屋ニ至ル迄不洩様可相触もの也。

寛政三亥年五月

右之通御触書之趣相守取引致来候。然ル處質置候もの何れも小前身薄之もの共ニ而日と質物差入当座之融通合を以渡世致候義ニ而、其度毎ニ請人相頼同道仕候義者実と心配仕、右受人前と相頼置不申候半而者火急金銀錢入用之節難出来、頼置候共毎と之義

ニ而先方ニ其節無余儀差支在之候得者難出来、且働渡世獨身之もの遠方ニ働ニ罷越日数相掛り候様之義間と有之并ニ病氣等ニ而步行出来兼候様之節難出来、其餘餘時質受人相頼候共容易ニ者承知致吳不申種と之儀ニ而差支実と心配仕候間、何共御触書之趣奉恐入候得共寛政度御憐愍被成下御振合之趣質請人ニ身元慥成ものを相頼置主受人證文差入置候間火急金銀錢入用之節質物持參致候ハ、取引致吳候様申談候得共、何分御触書之趣も御坐候ニ付相斷申入候得共、何分ニも前書之次第柄ニ而実と心配候由段と相頼、從來取引仕身元慥成向質置主受人證文差入置候分寛政度御振合ニ相泥ミ候義恐多御儀与者奉存候得共、無餘儀当座之取引仕御触書相背奉恐入御儀ニ御座候得共、置主受人證文取之、尤十二ヶ月限置主請人證文相改取引致来候分も間と有之候處、天保度御改正ニ付質物取方之儀関東御表より左之通御触書之趣置主請人同道罷越帳面ニ印形取之取引致来候得

共、何分前書之次第ニ而其日働キ取凌候もの共殊ニ
当節柄ニ而融通合いたし能無御座候半而者取續方心
配仕候義ニ而、置主請人証文取之当座取引致候義与
近来寛政度已後之振合ニ乍流弊相成在之、紛失物御
吟味等者今般名前帳面奉差上御取締も被 仰付、旁
惣代之もの格別入念相改勿論猥成取引等無之候様一
統実直正路ニ取引可致様堅申合候事。

天保度御触書

一 質物取方之儀置主請人俱ニ罷越候ハ、質を取不苦
候。 扨人ニ而印形式ツ持參致し名前申聞候共、質ニ取
致間敷候。 假令置主請人一統罷越候共、其品多分ニ而
身分不相應ニ有之哉、又者疑敷相見へ分者先々遂吟味
品ニ寄其ものを留置月番町奉行所江可訴出、若盜物等
質ニ取候もの之ニおゐてハ吟味之上其品取上代金者
損失為致品ニ寄咎可申附候。

但シ質ニ取候品模様并紋所を委敷留置右帳面之儀紙
数相改名主共押切申付候間、右之外紛敷帳面扱

間敷候。 且亦紛失物吟味之節名主共へ支配限リ
遂穿鑿其品有之ニおゐてハ早速町奉行所江可訴出
候。 尤名主方江帳面永く留置不申様、改次第差
戻し渡世之障リニ不相成様可致候。

右之通申渡候間町中名主共迄も其旨相心得自分紛失物
在之候節、一支配限リ入念吟味可致候。 若未熟之致方
相聞において者、渡世之もの勿論名主共迄急度可申附
候間、此旨可相守もの也。

天保十三寅年四月

右御書附江戸表へ至来候条、御書附之趣相守心得違無
之様可致候。 尤当地ハ名主者無之候ニ付、右名主之改
方者町々年寄共江申附候間、諸事御書附之趣相心得紛
失物吟味之節者、年寄并ニ其当主立會帳面引合セ相
糺、其品在之者早速可訴出候。 若不正之品質取候もの
有之不訴出、迫而相糺ニおゐてハ当人者勿論年寄共迄
急度可申附候間、其旨可相心得候。

但シ右渡世柄之もの年寄役相動候ハ、五人組共帳

面押切印致し調立會相改可申候事。

右之趣洛中洛外江不洩様可相触者也。

天保十三寅年六月

一入替質物之儀紛失物取調之節相洩候間、決而仕間鋪候事。

一鹿の子地并洪札相附有之候品都而下職之品与見請候ハ、一切取申間敷候事。

一呉服反物類杯者決而取申間敷、併シ置主呉服渡世ニ候得者、元方得与相札代銀等滯等無之慥成義ニ候ハ、別段請人取之入念質物取可申事。

一夜具蚊帳類貨物判附之品決而取申間鋪候事。

一質商賣之者看板茂不差出質物取候もの多在之由相聞候。此等之者共義者紛失物等詮儀之時分相洩候義も可有之候間、已來質看板出置可取之候。猶又其向之質屋共ハ相断置互ニ心附居相改可入念候事。

一質屋商賣之者看板を差出、近所最寄之質屋江可相断旨去ル酉年相触置候処、不相用内ニ而隱質取候輩在之

不屈候間、向後質屋商賣相始候者奉行所江相断之上簡板を差出、尤向寄之質屋共江申聞致組入、其筋之申合商賣可仕候。互ニ心附居聊隱質取居候もの承り次第早速可申出候事。

但シ右之通度と御触流御座候御儀ニ付、別而今般御取締被 仰付候御儀ニ御坐候間、互ニ心得附居聊ニ而も隱質取居候もの有之候ハ、早速惣代方江可申出候事。

一役用ニ付聊ニ而も私欲を構後闇キ仕方在之ニおゐて者急度可申附候事。

一質屋共改之儀ニ付我俣を申掛ケ及遲滯候敷其外不屈成仕方在之候得者早速可訴出候事。

右之条と急度可相守もの也。

享保十七壬子年

筑後
伊賀

十二月

右之通從古來御定法ニ御座候事。

質物歩上ケ一件之事

享保十七年子十一月利足歩下ケ御触書左之通

一質物利足之儀其品ニ寄月壹歩より貳歩迄ニ而相對次第ニ候。尤高直之利足不可取之事。

右之通利足初而御定ニ相成御触書之趣堅相守取引致來候之處、天保度御改正ニ付關東御表よりも質物歩下ケ并ニ當 御役所様よりも御触書左之通

一質物利足之儀其品柄ニより月壹歩より貳歩迄相對次第ニ而高利取間敷旨前より之定メニ候處、質屋仲ケ間取解ニ相成諸色直段引下ケ之儀厚御世話有之、尚亦世上賃金銀貳拾五兩ニ付月壹歩ニ御定メ被仰出、右之振合ニ而者質物之利足高利ニ相当リ候處、今般質屋渡世之ものより差出候利足書附之趣ニ而者是迄仕來ニ不抱格別引下ケ罷在候ものも在之候得共、今以引下ケ不申向も相見候ニ付、右之向者此上情より引下ケ左之割合よりハ高利ニ致間敷候。

金壹歩已下錢質之分

一錢百文ニ付

一ヶ月之利足貳文

金貳兩已下

一金壹歩ニ付

一ヶ月利足廿文

金拾兩以下

一金壹歩ニ付

一ヶ月利足十六文

金百兩已下

一金壹歩ニ付

一ヶ月利足壹分

但シ銀子ニ而取引致候節者、本文之歩合ニ准シ利足

請取可申候。

右之趣相守正路ニ渡世可致、尤是迄質入之品請戻し候節も、右之割合より高利ニ相当リ候分者、引直シ利足可受取候。尤此以後質屋渡世相始候者も右定メ之通急度可相守、若シ不正之取計致候もの有之ニおゐてハ吟味之上答可申附候。

右之趣、洛中洛外江不洩様相触もの也。

天保十四卯年三月

一右之通利足引下ケ被 仰付候。然ル處、右歩合ニ而ハ

渡世引合不申候間、追々商賣替仕候者も有之、自ら質渡世之向追々相減シ身薄働渡世之者共日用融通合ニ差支、甚々難渋之折柄、左之通御触流御座候。

一質物利足歩下ケ之儀申渡置候処、從來之利足割合相減シ小前之質屋共難義之由ニ而、自ら家業見合候者も有之哉ニ相聞へ、其日暮之もの者質物を以当座之間を合候処、家業見合候もの之候而者、自ら下々之もの難儀可致候ニ付、小前之者為融通之当分質物利分之定メニ不拘、元録度已來之振合ニ見合相應之利分を請取、聊危踏す正路ニ取引可致旨其方共々右渡世之もの共々不洩様可申聞候。

右之趣於江戸表名主共々申渡有之、当表質物利足之儀者先前触渡置候義無之、質屋仲間相立在之節其品寄月老歩々式歩迄相對次第ニ而、高利を取間敷旨定候処、右ニ不拘格別引下ケ致し渡世致候ものも有之、又者定メ通り之利足ニ而質を取候ものも在之、其上仲間取解後新規質屋相始候もの等心得違無之様当三月利足割合之定メ申

附、右割合より高利ニ致間敷、勿論高利ニ相当り候分者引直シ可請取旨相触置候処、今般於江戸表小前之もの為融通前書之通申渡有之候ニ付、当表之義者当三月利足割合之定メ相触、已前之通当分月老分より式歩迄其品相應之利分受取可申候。若シ家業見合居候もの有之候而者小前之もの融通ニ拘り難儀可致義ニ付、右之趣相心得正路ニ取引可致候。此旨洛中洛外不洩様可相触もの也。

右之通已前之利足歩合ニ而月老歩より式歩迄其品柄ニ應シ相對を以取引可致旨被仰渡候ニ付、右之趣相守取引致來、然ル處当節諸色莫大之高價ニ相成、質渡世之もの共此姿ニ而者逆も相續難出來、殊ニ類焼場之向尚更以難取凌如何可致哉与一統段々申談候得共、外ニ取凌方之勤考も無之、此上者利足歩増御願申上度与奉存候得共、容易ニ者御取上之程も御座在間敷、段々旧記取調候處、正徳度衣類之向利足月式歩半諸道具類月三歩ニ而取引仕候義も有之、右振合を以御願申上度、種々心配之上大坂表御振合承知致度存知、則橘屋源太郎

殿義彼之地に質屋夫と親類も有之、右同人并八幡屋弥兵衛殿近江屋吉兵衛殿下坂致、大坂御役所様御振合段と承合候処、利足之儀前書正徳度振合之通御定法之趣ニ而、当時ニ而も右歩合を以取引致罷在候儀ニ御座候間、大坂表同様之利足ニ諸色如元之直段引下り候迄当分之処、衣類之向式歩半諸道具之類三步ニ歩増被成下候様一統深ク申談、元式拾組之行事組惣代兩人宛都合四拾人連印之内、屯組より屯人宛拾人并ニ町役拾人質屋一統為惣代、元和年中より天保度迄之利足旧記差副慶應元丑年十一月 日西

御役所様江罷出御歎願奉申上候。段と御取調可被成下候御儀ニ者御座候得共、何分ニも不容易御義ニ付、急速御調も難出來候哉御沙汰茂無御座候ニ付、一統深ク心痛仕諸色益以高直ニ相成、実ニ以難取凌候ニ付、尚亦一統申談廿組行事式拾人連印仕慶應二寅年四月十日奉追願、厚御尊配被成下候御儀ニ者御座候得共御沙汰之程も無御坐、尚惣代之者申談拾人連印仕、同年五月

朔日奉再願御沙汰之程日とニ挙而奉待上候得共、御沙汰無御坐候ニ付、再三奉願候御儀何共不恐願御儀ニ御坐候得共不得止事、惣代拾人連印仕尚亦同月廿日奉御歎願候處、格別之厚以御憐愍御聞濟之旨、惣代一統御召出結構ニ被仰渡難有奉存知御請書奉差上候。

御請書

一其方共儀質物利足之儀從來月屯歩式歩迄ニ而取引仕來候之處、近年諸物價騰貴之上品と難渋之訳を以一個月式歩より三步迄歩増願之趣從來之仕來を變革之儀者不容易義成レ共事実難渋之由、無餘儀相聞候間、出格之訳を以願之通聞届候間、月式歩より三步迄之利足を以其品ニ應シ正路ニ相對致し取引追而物價引下り候ハ、速ニ仕來之利分ニ改候様いたし、其段可届出、尤右之趣洛中洛外江申通書差出候間其旨可存候。

差副人江

右之通申渡候間其旨可存候。右申渡之趣一同証文申附候。

右之通被 仰渡奉畏候。依之御受書奉指上候。以上。

慶應二寅年六月十日

質屋元式拾組之内

元宝銖組惣代

五条西洞院西江入町

乍年寄 柳屋 吉郎兵衛

五人組 忠兵衛

元鳥帽子組年行事

富小路御池上ル町

乍年寄 近江屋 傳兵衛

五人組 作平

元福寿組年行事

錦小路宝町東江入町

伊勢屋 又兵衛

年寄 甚三郎

元中庸組惣代

不明門松原下ル町

乍年寄 津国屋 勘兵衛

五人組 清兵衛

元老松組年行事

四条堀川東江入町

乍年寄 近江屋 吉兵衛

五人組 利左衛門

元養老組惣代

三条高倉東入町

岐阜屋 太吉

年寄 吉右衛門

元大黒組惣代

東寺内上ノ口大手町西入町

小田原屋弥右衛門

年寄 徳兵衛

元布袋組惣代

宝町四条下ル町

越後屋 伊兵衛

年 寄 治 助

元常盤組惣代

醒井高辻上ル町

菱 屋 伊 兵 衛

年 寄 嘉 兵 衛

元初寅組惣代

仏具屋町松原下ル町

近江屋 與 兵 衛

年 寄 甚 兵 衛

右之通一統連印仕奉差上候御触書則左之通

一質物利足之儀当分月老歩ゝ式歩迄其品相應之利分可請
取旨天保度委細触置候処、近來追ゝ引上リ候物價引競
候得共不釣合ニ而、質屋共渡世ニ難相成、無據休商轉
業之ものも不少次第ニ及び、衰微難洩之由ニ相聞、右
躰追ゝ及休業候而者不融通基ニ付、追而諸物價引下リ
候迄之間、当分一ヶ月式歩半ゝ三步迄之利足を以其品
ニ應シ相對可致取引旨、質渡世之もの共江申渡候間、

右之趣相心得正路ニ可致取引候。

右之通洛中洛外江不洩様可申通者也。

慶應二丙寅年六月

前書之通被仰渡市中一圓御触流被成下、段ゝ御尊配厚
以思召結構御憐愍御聞濟被為成下以御蔭相續取凌も相
立、如何斗歟難有仕合奉存候。格別之御仁恵御恩沢之
程質屋渡世之もの共永世忘却不仕候様、組ゝ年番行事
老分之もの共永ゝ申傳へ例年參會之節右書面之趣一
統江為読聞末ゝニ至迄急度不怠様可仕候事。

并ニ右御触書之趣堅ク相守右歩合ゝ聊高利ケ間敷義一
切致間敷正路ニ渡世相宮ミ可申様一統申合候事。

質物利足歩上一件之事

一板倉周防守様ゝ元和八戊年八月質物利足之儀相對次第
ニ而取引可仕旨被 仰渡候。其後歩合段ゝ次第在之正
徳度銀百匁ニ付一ヶ月銀式匁諸道具類銀百匁ニ付一ヶ
月銀三匁宛ニ而取引致來候。然ル処享保十七子年御奉

行所様、質物利足の儀始而御定月壹歩、式歩迄ニ而其品柄ニ應シ相對次第ニ而取引可仕旨被仰渡、右之趣堅相守取引仕來候處、天保度御改正ニ付利足歩下ケ之儀被仰渡候。然ル処、無餘儀次第柄在之此間享保度御定之利足ニ而取引可仕旨御触流御座候。如元之利足ニ而取引仕來、然ル処、近來米穀始諸色莫大高直ニ相成、外渡世向勝手次第直上致候得共、質渡世之儀者勝手俤ニ利足引上ケ候義も難出來、一統相統取凌方心配仕居候之処江元治元年子七月十九日大変ニ付、上者中立賣迎、南者七条まで西者東堀川より東者河原町迄一圓類燒致候。質屋之向土蔵等不殘燒落いたし候向も在之、土蔵残り候向も有之候得共、何分大変之儀ニ而質渡世之向猶更以當惑難洪罷在、諸色増々以高直ニ相成取凌方難出來、一統難洪弥増別而類燒場之向実ニ以必至之場合ニ而途方ニ暮罷在、外ニ取凌方之勘考も無之、此上者利足歩増御願奉申上候、致方も無之候得共、容易ニ者御取上ケ之程も如何と、銘々寄々心痛仕申談罷

在、類燒之向より八幡屋弥兵衛殿江段々申談、歩上ケ之儀旧記取調候處、正徳度前書之通一ヶ月式歩、諸道具類者一ヶ月三步迄ニ而取引致來候振合も在之、右之歩合を以御願仕度与奉存候得共、容易不成義ニ付御取上之程如何と段々心配仕候得共、何分右振合者古牛事眼前ニ睨与仕候振合無之候半而者睨与不仕趣ニ付、無餘儀大坂表質屋振合得与承知致度与奉存知、則橘屋源太郎殿義彼之地ニ夫々親類も有之并八幡屋弥兵衛殿近江屋吉兵衛殿右三人下坂致し、大坂堂嶋裏町難波屋伊三郎殿江參上致し、段々次第振承合候處、右正徳度振合之趣ニ有之候得共何分銘々取崩ニ取引致居候ニ付睨与致候義相訳兼候間、其御支配町年寄の方にて承合貰ひ候へ共、右御定法之趣ニ候得共、大坂御役所様全ク之御定法承知仕度与奉存知、則野村鉄三郎様御親類三日月御屋鋪御留守居坂上淳蔵様義右八幡屋弥兵衛殿兼而御懇意ニ有之候間、右之方江參上仕右次第柄御内談申上候處、厚御熟配被成下天満組御与力八田五郎左衛

門樣御儀是亦野村樣御親類之由ニ付右之御方樣江早速御内談御願被成下、段々御調被成下候處、右正徳度振合通利足衣類向者月式步より諸道具類者月三歩迄ニ而相對を以取引可致候義全ク之御定法之趣ニ御書附を以御答被成下候ニ付、右御振合并正徳度之次第柄を以利足歩増式拾組一統組行事并組々惣代都合四拾人連印仕、右類燒場之内拾組より都合十人并ニ町役十人連印為惣代西 御役所樣江午恐御歎願奉申上候處、程直御取上ケ被為成下、御上役野村鉄三郎樣御下役柴幸三郎樣御掛リニ御坐候。段々厚御調可被成下御儀ニ御坐候得共、何分容易不被成御義ニ而急速御調之程難被遊、然ル處右願面ニ大坂表御振合之義書顯シ御坐候ニ付、右廉大坂御役所樣江御問合ニ相成候趣午御内々承知仕候ニ付、何卒程直御答可被成下候得者難有奉存、八幡屋弥兵衛殿尚亦下坂被下坂上樣西 御奉行樣御公用人加藤孫七樣并右八田樣江深御内談格別ニ被成下、程直御返書御坐候趣難有奉存候。然ル處、野村樣御儀御

所御表御普請御用掛ニ付無餘儀御懸リ御替ニ相成尚亦深心配仕候之處、砂川鍵次郎樣御掛ニ相成幸ニ野村樣御親類ニ而可然御伝達被成下難有奉存候。其後厚御取調之上御聞濟御沙汰之程御坐候与日夜幸而奉待上候得共、何分御太切成御儀ニ而種々無餘儀御次第柄御坐候趣ニ而御沙汰之程も不被為在候間、不得止事不恐願都合四ケ度奉歎願、猶又 御奉行樣江奉御内願種々心配仕候義難申盡、

御上樣格別御尊配以御蔭御願之通結構御憐愍御聞濟被為成下、重々難有仕合奉存候。右願面之次第并被仰渡之趣箇条則左之通御座候事。

右一件

宝銖組之内	柝屋	吉郎兵衛
同組	橘屋	源太郎
老松組之内	近江屋	吉兵衛

同組諸事取調人

八幡屋 弥兵衛

右利足歩上一件正徳度振合を以御歎願仕度与存知、段々心配仕候得共、右振合而已ニ而者今一段耽与不致候趣ニ御坐候ニ付、大坂表御振合委細承知仕慥成義書記シ御願申上候趣ニ御坐候間、無餘儀大坂御振合分之處段々心配仕候上、右御振合願面ニ書顯シ候義ニ付、当御役所様の大坂御役所様江御問合被遊候趣ニ御座候。右御返書之写兼而御内頼申上置候御方様御内々御洩シ被成下候御義ニ御坐候。右御返書振り耽与不仕候ハ、如何ニ相成行候哉与奉存候之處、前以格別之心配相盡シ置候間、御都合能御返書被成下候ニ付、結構ニ御憐愍御聞濟被成下候御義ニ而難有奉存候。右御懇配被成下候廉々永代帳江記置者也。

当御役所様大坂御役所様江御問合御返書之写

御書面御問合之趣致承知、則嘉永度諸問屋仲ケ間再興被仰出候節、当地質屋共義も再興相成、其節之利銀衣

類者式歩道具者三步之定法ニ有之、併銀高成質物者衣類者袴歩半道具者式歩半迄取來、嵩高成品物藏敷之儀者質方差出候仕來ニ有之候。其後増減之儀願出候義無之候間左様御承知可被成候。以上。

追而天保度質物利下之義被仰出於当地も触渡置候得共、小前之質屋とも難儀之由ニ而家業見合候ものも有之哉ニ相聞、其日暮之もの共者質物を以当座之間を合候處、右鉢質屋共休商致し候而者、自ら下方之もの難儀可致候ニ付、其節之御城代江相達小前之もの融通のため当分右利分之定ニ不拘、元録已來之振合に見合相應之利分受取、無危踏取引いたし候様為及御達置候義ニ而、當時本文之通有之候。尤右之外御城代江相伺義者無之候。且取調中御答延引相成候段宜御承知可被成候。已上。

元治二乙丑年二月二日

一前件之都而次第柄ニ而 御上様并御掛り御役人様種々

無餘儀御訳柄御坐候ニ付、段々御尊配厚以御憐愍結構御聞濟被為成下、以御蔭相続取凌も相立如何斗歟難有仕合奉存候。格別之御仁惠御恩沢之程質屋渡世之もの共永世怠却不仕候様組と年番行事老分之もの共ふ永と申傳へ例年参会之節右書面之趣一統江読聞セ末と子孫ニ至ル迄不怠様可仕事

并ニ右御触書之趣右歩合より聊高利ケ間敷義一切致間敷正路ニ渡世相當ミ可申様一統申合候事。

一質物利足歩上掛 下 拾組

一仲ケ間御取締掛 上 拾組

右之通式手ニ相成

一質屋仲ケ間御取解中年久敷相立、一体不取締ニ付、享保十六年十月中京質屋都合六十六人申合御取締之儀御歎願奉申上候処、御調中聚楽辺最寄質屋都合五拾五人連印を以彼是意存申上、一統気合不仕候ニ付、御取建難被遊候得共、一体不取締之趣ニ御憐察被成下為御取締之左之通御触流御座候事。

一質屋商売之者看板差出近所向寄之質屋江可相断旨去ル酉年相触候所、不相用内とニ而隱質取候輩有之不届ニ候間、質屋仲ケ間行事相立吟味仕度候旨、中京質屋共申出願之趣意者一通在之候得共、惣質屋共不得心大^{マツ}一者新規之儀難申附候。向後始而質屋商売致候もの者奉行所江相断候上看板差出、尤向寄之質屋共へも申聞組入いたし、其筋之申合商売可仕候。是迄之簡板差出候質屋共も相止メ候歟、又者休ミ候ハ、是亦奉行所江相届看板引可申候。

一盜物有之節其品書附を以相触候得共、多ク不相知候。畢竟右隱質取候もの触洩候故与相聞へ旁以不埒候。且亦盜賊召捕吟味之節、不慥成与乍存知申分ケ迄ニ請人取候族在之候ハ、以來不埒質物取候もの者吟味之上取上、品ニ寄答メ可申附候。此外去ル酉年相触候趣急度相守、不埒之筋無之様可相心得候、已來看板も不差出隱質取候もの相知レ申候ハ、急度可申附候。

右之趣洛中洛外可相触もの也。

享保十六年亥十二月

前書之通御触流被成下候得共今一段御取締茂難相立候哉、質仲ヶ間立之義一統氣合不仕、何分御調物難行渡御差支之御儀も御座候哉、然ル処糸割符難洩為助成質仲ヶ間改會所之義年寄共兩人より御歎願被申上候ニ付、御聞濟之趣左之通御触流御坐候事。

糸割符年寄

三宅 寿 圓

津田 勘兵衛

今般右兩人江質物改役申附候条、糸割符仲ヶ間之者共相動候間其旨可存候。惣而質屋古手屋共商賣筋紛敷無之様ニ可致旨前以度と申附候処、不相用猥ニ相聞へ候。且亦紛失物等在之節度と相触候得共其品分明ニ不相知候。畢竟質屋仲ヶ間之外近年内とニ而諸色入替与名附或者賣切之仕形ニ而隱密ニ質物取候もの共多く在之、紛敷吟味不届候故与相聞へ不埒ニ候。向後相定質屋之外にて右之仕形ニ而質物取候義令停止候。若シ左様之義有之者、其品

不殘可取上候。近と右會所相立候上ニ而、質看板受取向寄次第組合、胡乱成質物不取之様ニ可申合候。改方之儀并ニ會所出銀等之儀吟味之上追而可申触条、其旨洛中洛外質屋古手屋江可相触もの也。

享保十七年子十一月晦日

右之通御触流御座候ニ付、質屋古手屋改會所油小路丸太町上ル町東側ニ相立候。右會所諸入用之儀質屋家別ニ月毎ニ銀式勿ツ、出銀致候様御触流御座候事。

右之通會所御取建ニ付御触書数通御座候得共、前と御定法御触書御同様之御儀ニ御坐候間略之。

一前段之通質改會所糸割符年寄とも江御免御座候御触流御坐候ニ付質屋一統誠ニ以相驚、別而是迄聊因縁も無之糸割符江諸入用等差出候義迷惑難洩仕候ニ付、質屋最寄とより深く申合御宥免被成下候様御歎願奉申上西御役所御門前迄四五百人斗詰掛候之処、御東西御奉行様御列座組と行事之もの丈ヶ御白洲江御召出御当

番

筑後守様

伊賀守様

御立會之上願書都合拾三通之内塔之段組一通丈ケ御讀上被遊候而、外書面右ニ似寄候文面也伊賀守様より御利解之趣。市中江触書も差出候改役人^と申義者畢竟名前斗ニ而出銀之儀者運上之様ニ相心得差出候様与被仰渡候而願書御下ケ相成候事。

一質古手改會所御用向糸割符之もの相勤罷在候得共御用向駈^と難行届候ニ付、右役前者并質屋組と行事御役所様江御召出蒙御作度候義も御座候。何分糸割符之者者質渡世筋不相心得候間、何角彼是^と御用向相勤兼候趣ニ而、則和久屋九郎右衛門^と申者右質古手改會所之株借請年と銀百枚宛糸割符江運上差出御用向之義者右九郎右衛門一手ニテ相勤罷在候処、九郎右衛門義元來^と甚タ手薄ニ而暮兼、仲ケ間^と段と勘弁も致遣、然ル処御東西 御役所様^と質屋中江追と御拝借被 仰付、組

と江分借仕、右御利足者勿論年頭八朔夫と御廻勤之儀者家別ニ割出、右御拝借ニ付九郎右衛門義江世話料等差遣為相勤罷在、右御拝借金之廉を以質物改會所^と唱へ名目貸附を相始、専ら取引出來追と繁栄仕候得共、從來之厚恩を謝し、睦間敷可仕筈之処、立身隨ひ役威を含ミ權威ニ暮り、質屋一統配下同様蔑ニ致し、別而御用向兎角手重く申立、若年之もの并名代勤之もの無餘義御用向御座候節申談候得者実意を以厚心副可致筈之処、只無益ニ叱付恐驚仕候。右様之都而取計ニ相成、質屋一統誠ニ以從來難渋罷在候折柄、去ル天保十三寅年御改正ニ付質仲ケ間改會所御取解ニ相成、紛失御調物町中江御触流御座候。其節より右糸割符并和久屋事磯谷九郎右衛門義因縁打切、尤入用も不掛從來之愁も相離レ一統深相悦罷在候事。

一嘉永六癸丑年間屋仲ケ間御再興被 仰出、質屋仲ケ間之儀追而御沙汰可被成下趣ニ御坐候得共其後御沙汰無御坐候ニ付、安政四巳年四月糸割符役前之者并磯谷

九郎右衛門、質古手會所御再興御願奉申上度候間、質屋俱と連印致與候様申談有之候ニ付、質屋一統江申談候得共何分ニも已前改會所之節元來より都而前段之次第ニ而、從來難洪罷在、折角愁相離レ一統安心罷在候仕合ニ御座候間、右両家江相断申切候之処、糸割符年寄并磯谷九郎右衛門連印を以質古手改會所如元之御再興御取立可被成下候様御願奉申上候趣ニ御座候事。

一質屋一体何分無仲ケ間ニ而者不締ニ付、種と差支候義も在之候ニ付、質屋一統申談之上安政四巳年六月質屋五百三拾人連印西御役所様江仲ケ間御取立之儀早と御歎願奉申上候処、右者東御役所様元御掛り之趣ニ而御傳達ニ相成、段と御調之上願面不調等之儀在之、一先御願下ケ仕、其後得与取調直ニ御願奉申上度候得共何分糸割符并ニ元質改會所借主磯谷九郎右衛門彼是与為差縫候義も有之無餘儀延引ニ相成有之、何分無仲ケ間ニ而者不取締種と差支候ニ付仲ケ間立御願申上度廿組一統江申談致度候得共何分多人数之義ニ而、申談

候共彼是与談合隙取其内ニ者糸割符并ニ九郎右衛門方江相聞へ、尚亦為差縫候義眼前之義ニ付一統江不申談有志之もの深く申談之上質屋一統為惣代并筒屋庄兵衛始外拾四人連印之内右庄兵衛并ニ篠屋九兵衛山形屋武右衛門八幡屋弥兵衛尚亦為惣代文久二戌年十二月廿日東御役所様江罷出御願奉申上候。右御調中御上洛御両度被為在御用多之程御座候歎御沙汰も無御座候。何分無仲間ニ而者不取締之義等多く、殊ニ利足歩増之義前書之通御聞濟ニ相成、無仲ケ間ニ而者隱質取居候者之為方而已ニ而、却而旧業之者共衰微ニ陷入難洩弥増候ニ付、式拾組行事老分一統申談之上右組と老分行事四拾人連印質屋一統為惣代慶応二寅年五月ニ追願并ニ御触流等之儀も奉願、其後同年六月廿組之内六組一統為惣代罷出猶奉再願候処、段と御調格別之御憐愍御願之趣御聞濟左之通被仰渡御触流被成下候ニ付、則左之通御請書奉差上候。

御請書

一私共仲ヶ間現在之姿を以再興之儀先達而奉願上、尚亦享保度御触示之振合を以商法取締等之儀度々奉追願候処、今日被 召出右願ニ不拘近來不取締ニ付追而仲ヶ間再興之御沙汰御坐候适当分左之通。

御 触 書

質屋之儀者先前より触示候商法有之、吳服其外商ひ品と相見へ候類数多質入之族在之候ハハ先と能と相糺胡乱成り品者取不申様相心得、置主證人印形持参候ハ、十二ヶ月限り之約定を以取引いたし、尤表ニ目印之看板差出質渡世可致筈之處天保度仲ヶ間取解後者自ら不取締ニ成行、別而近來素人共猥ニ並合杯与種々之名目を附、纔之日限を以事實質物ニ紛敷取引いたし候もの不少哉ニ相聞如何之事ニ候。向後都而質物取引致候もの者当節紛失物等吟味之時分彼是不行届之次第も在之候ニ付、最寄々之質屋共申談奉行所江名前相届、前々之商法等堅相守看板差出吟味之品取調入念相改不取締之儀無之様正路ニ可致候。尤新規渡世相始候迎無謂出金為致間敷候。若此上隠

質等紛敷取引致候もの有之候ハ、吟味之上急度可申附条、此旨洛中洛外江不洩様早と可申通候事。

寅十一月

右御触書之趣堅相守実直ニ渡世相當不取締之義無之様可仕候。右ニ付自法ヶ間敷義を申合手狹窮屈等之儀有之候ハ、急度可被 仰付旨被 仰渡難有奉畏候。依之御請書奉差上候。以上。

慶応二丙寅年

十一月十八日

大宮上立売下ル町

井筒屋 庄兵衛

一条猪熊東へ入町

篠 屋 九兵衛

笹屋町知恵光院西へ入町

山形屋 武右衛門

新シ町御池下ル町

八幡屋 弥兵衛

下立売堀川西江入町

伏見屋 儀助

紫野大徳寺境内新門前町

松屋 利兵衛

上立売小川西江入町

平野屋 文五郎

寺町今出川下ル町

木屋 休四郎

河原町丸太町上ル丁

亀屋 六右衛門

松原建仁寺町東入町

鍵屋 文次郎

祇園新地新橋林下町

野田屋 善助

今出川知恵光院西入町

伊勢屋 米太郎

御奉行様

右之通仲ヶ間御取締被 仰付、市中一圓江御触流被成下
候御儀ニ御座候ニ付、前々御定法右箇条之趣堅ク相守大
切ニ渡世可仕候事。

一此外数ヶ条前々御触書御座候得共御同様分ニ付略之。

一統申合之事

一新規最寄組内江加入之儀申談出候ハ、其組内申談済
之上惣代江及示談ニ、惣代より以前振合通廿組江廻達
申談、一統差合無之候得者加入為致早速 御役所様江
御届申上、其外代替変宅品替等之儀早速惣代江申出次
第 御役所様江差上置候帳面御下ヶ相願、点合等仕直
様差上候様可仕候事

但シ惣代兩人并ニ組年番附添御願奉申上候事。

一 諸入用定式之外無益之出銀等決而為致間敷候
事。

一 盜賊紛失物御書附御達シ相成候得者早速写取早々順達

仕念入取調、似寄之品在之候得者御掛り御役方様へ早
と御窺奉申上候事。

但シ似寄之品御伺中置主請人方江相聞へ候而者自然
其盜賊失セ候而者御吟味御差支ニ相成候間決而
相洩不申候様可仕候事。

一御調物御書附御達無之品御下役之筋も似寄ニ候間差出
候様被申立候様之義在之候ハ、御掛御役人様御名前睨
与承り置品物持參致候事。

一御役所様御拝借金銀組と江分借仕罷在候。右御利足御
廻勤者勿論元金銀御上納被 仰付候節何時ニ而茂無遅
滞御上納御差支ニ相成不申候様、組と年番行事のもの
共厚ク相心得太切ニ御世話可仕候事。

一質物利足歩上之儀今般御触書之通堅相守、勝手尽ニ歩
下ケ致候而者手薄之もの共甚差支候間決而糴取引致間
敷候事。

一質屋方江差入在之候質物、置主江相對を以自分之方江
質物為置替候義決而致間敷候事。

一御公用者勿論都而一統申談之義何事ニ不寄多分之方ニ
隨ひ我意申立間敷候事。

但シ組内一統不承知杯与 忝人立相拒ミ候様之儀有之
候得者其組内睨与 相糺、自然忝人立彼是申拒ミ
候もの之候ハ、殊ニ寄 御役所様へ御届奉
申上看板為取引取休職可為致候事。

一 奉公人手代不埒筋有之暇差出候もの同商賣方へ
養子者勿論奉公為致候節元主人へ相答、差支無
之候ハ、召仕可申候。尤元主江無相答勝手尽
ニ召仕候義者一切致間敷様堅ク申合候事。

一前書御定法申合箇条之趣組と毎年參會之節為讀聞、堅
ク相守猥成取引致間敷答申合候事。

一新加入并讓替其外都而品変等之義者早速惣代方江申出
式目之通聊無相違出金可仕候事。

右之通前と御触書之趣并 商法一統申合等之儀堅相守猥成
取引決而不仕、実直正路ニ渡世可仕候。依之年番行事一
統連印仍而如件。

質屋元貳拾組

惣代 扇子組

鍵屋 文次郎

同 宝銖組

枅屋 吉郎兵衛

同 末廣組

篠屋 九兵衛

同 老松組

近江屋 吉兵衛

右之通奔走人

老松組

八幡屋 弥兵衛

慶応三丁卯年正月

四「乍御内々奉願口上書」(表紙)

口上書

一今般 御一新ニ付諸仲ケ間御取建被遊候ニ付、質仲ケ

間之儀洛中洛外町續質渡世之もの共粗取調、凡五百軒程連印仕、商法御會所江奉願 御聞濟 御印札并 御書附等御下ケ被成下、仲ケ間相立難有奉存候。則、人撰を以肝煎貳人相究候様被 仰渡候。然處、差掛リ候義ニ而惣代と唱へ取極置候者、不取敢肝煎と相改御断奉申上候。辰年中相動濟候仲ケ間不取締之次第左ニ奉申上候。

一元來質渡世之儀ハ盜賊紛失物御吟味筋第一之御儀ニ而、御調物日々ニ夥敷御沙汰有之候ニ付、外仲ケ間取締無之節ハ質屋御取締相立御座候ニ付、惣代相立置御用向相動候ニ付而者、質屋洛中洛外町續何分多人数之義ニ而、一手ニ而者 御調物御書附容易ニハ通達難出來候ニ付、寂寄方角ニ而廿軒亦者廿四五軒宛一組と致し、都合貳拾組ニ組分仕、老組と行事相立置候。御役所様より御調物御書付老通右惣代江御達し御座候へ者、廿枚相認メ老通ツ、右貳拾組と行事江相達、其組江急速通達仕候。御書附写取取調似寄之品有之候へ

者、早と御伺奉申上候。右惣代之義、渡世柄御用筋能相并居、手代老兩人有之相應之身柄之もの無御座候半而ハ難相勤、右相應身柄之もの共ハ御役儀相勤候義何分御調物御書附点數長短有之候へ共、是迄者年と凡四五百通程御達有之、右夫と通達似寄之品等夫と取調方仕候義ニ而、殊之外御用多ニ付、甚心配ニ奉存銘と勝手尽を申立相勤呉不申、不束之ものニ為相勤候而ハ行届兼候与心配仕、種と申談無余儀右貳拾組鬨を取、鬨ニ当り候組内ニ而人撰仕、壹人宛罷出都合四人惣代相勤候様取究候。右鬨ニ当り候組ニ相應之もの之候へ者宜候へ共、無之節ハ不束之者ニ而も不都合成ニ一ケ年宛順送り仕、肝煎名目而已ニ而も相勤來候ニ付、御用向自分行届兼一体不取締ニ御座候。

一外商職仲ケ間之儀格別之御用向無御座候哉ト奉存、肝煎之もの心配薄く有之候へ共、何分質渡世之義ハ前頭之通御調物御用日とニ多く、洛中洛外町續夫と近在質屋共へ御旨趣を承り、御調物御穿鑿行届候様手厚く心

配可仕咎ニ候へ者、肝煎役萬事相并居、慥成もの人撰ニ而肝煎不仕候半而ハ、御用向相勤り兼候。然ルニ鬨を取勝手尽ニ肝煎相定メ、半季亦ハ一ケ年限にて退役仕候而者眞之人撰ニ而ハ無之候ニ付、御用向難行届候義ハ勿論、質屋取締方迎も難相立、何共歎ケ敷奉存候。

一前書之通最寄方角相立置、廿軒亦ハ廿四五宛組分ケ致置、御調物急速行渡候様仕置候之處、去ル子年大火之節類焼致候もの共諸方江散乱致、當時仮宅致居候者多有之、并ニ其後段と猥ニ相成、新規質商賣相始候者共最寄方角を不構銘と勝手尽ニ加入為致候ニ付、當時一組ニ四五十軒も有之、又ハ七八軒も無之組も有之、別而廿丁卅丁程相隔有之候ニ付、御調物御書附等中と以容易ニハ相廻り方難行渡、火急御調物等之節甚隙取御差支ニ相成申候間、肝煎之もの共一統江申談組替相改、御用向行届候様可仕咎ニ候へ者、等閑ニ致置候義奉恐入候。

一西岡南山城夫と近在質屋共々差加へ之儀取扱致吳候様、肝煎之もの江段と頼談有之候へ共打捨置、更ニセ話不致候。質仲ケ間加入之義ハ御調物專一之御儀ニ候へ者、夫と加入為致、御調物一圓江行渡候様厚セ話可仕筈之処、等閑ニ致置候義何共奉恐入候。

一昨辰年仲ケ間相立候砌、人撰肝煎取扱奉申上候筈之処、前書之次第柄ニ而不取敢鬪当り惣代之者肝煎と相改御用向相勤罷在候内、大文字屋伊右衛門義質仲ケ間江加入致居候へ共、質物ハ聊も取扱不申、植木鉢物類渡世ニ致居候者ニ而、質渡世御用筋之儀一向相心得ざる元來不実意之者ニ而、兎角御用向等閑ニ仕、同役老分之もの申論も聊相用ひす、都而之義相拒候ニ付、一統甚以迷惑至極ニ奉存、既ニ元町御奉行所ハ質屋一統江多分之金子御拝借被仰付、銘と分借罷在、御上納之儀御沙汰御座候ニ付、夫と取集メ仕居候ニ付、旧臘迄ニ御上納可仕候哉ト奉存居候之処、右伊右衛門義彼是不実意之儀を申立差延し候趣ニ承知仕候。乍併 御太

切之御儀ニ而当年役前之もの心配仕、御上納可仕御儀ニ奉存候へ共、右様之次第柄ニ而老分之もの共江右伊右衛門強く申張候ニ付、被是正議論談仕候義甚うるさく存、銘と不差構候様相成行、弥以不取締有之候処、当春退役申出候ニ付、一統安堵仕、後役之者 御趣意之趣ヲ以種と申談候へ共、何分ニも前段之種と訳柄ニ而兎角旧例銘と勝手俾申立、為方之実意薄く相成、一統之内人撰仕肝煎相極候様之場合ニ難相成、矢張如已前之組と鬪当り之組ハ無余儀不都合之者も在之候。当巳年肝煎別紙名前書之通ニ御座候。一体之取締方ハ迎も行届兼候哉ト奉存候。何分多人数之義頭立重立心配仕候者無之故、御趣意之程も難相立恐入候。

一質渡世之儀古來ハ屹度仕候御趣意之程も御座候間、御一新之折柄ニ付御取調奉願度御儀も御座候。并ニ質取引之義前と種と御定法等有之、先是迄通之振合を以取引罷在候へ共、今般質屋仲ケ間御取立被成下候御儀ニ候へ者、御定法等御改被成下候様取調御同奉申上度

候ニ付、老分之もの共段々申談居候へ共、右様之義ハ役前之者万事相弁居、睨ト不仕候半而ハ如何体心配致候共、迎も難行届趣ニ而心配致呉不申、此俣等閉ニ致置候而者質物取引之義自然不行届之義等有之、蒙御察当候様之御儀御座候而者奉恐入候。右等之義銘々心配仕罷在候儀ニ御座候。

一肝煎役前書之通圖を取、不束之ものニ而も年々名目而已ニ相變肝煎役相動居候而者、幾年相立候とも睨ト仕候役前之者出來不申、此姿ニ而延々ニ致置候へ者日々ニ取乱レ、御用向等ハ忽チ御差支等之義御座候哉ト深心配仕、且ハ今般難有御趣意之程等閑ニ相成候而ハ実ニ奉恐入候ニ付、取締方種々ト申談合居候へ共、何分洛中洛外并ニ夫々近在之向共一圓之取締方相立不申候半而ハ御調物一圓江難行渡候ニ付、取締方仕候者ハ質渡世御用筋相弁居、別而悴并ニ手代等も有之、老功実意之者ニ而身体向相應ニ相暮居候ものニ無御座候半而ハ御用向叮嚀ニ行届候様難相動、仲ヶ間一体セ話も不

行届大勢之者共氣服も不仕候。依之、種々勘考仕候処、別紙之者共肝煎役相動呉候へ者差支等も無之可然義ト奉存候へ共、私共ハ申立候共種々之次第柄ニ而心配ニ存、迎も相動呉不申、何分下方ニ而肝煎人撰取極候様之義ハ迎も難出來候間、此上ハ被 仰渡候御趣意通

御上様ニ而御人撰被成下、可然人体之者江仲間肝煎被仰付候より致方も無御座候間、右之もの共身元御調之上御差支等無御座候へ者、質屋肝煎取締方被 仰付京都府 御役所様江日々ニ出勤仕

御役人様ハ都而 御用向御直ニ被 仰付候様相成候へ者、御用向行届候様 御太切ニ相動、質屋大勢之者共氣服可仕候。且、洛中洛外并ニ山城国中一圓之御取締方も相立候へ者、御用向一圓江委く行渡可申候間、右之趣御願奉申上度ト奉存候へ共、何分役前之者共私共ハ奉願候義ハ恐多御儀ト奉存候。前書種々次第柄 御憐愍 御人撰之上肝煎役御定被成下候へ者、質仲ヶ間

御取締方駈与相立難有仕合奉存候。此段乍御内と幾重
ニも奉願上候。以上。

当已年肝煎名前書先達而御届奉申上候名前左之通ニ御座
候。

質屋仲間肝煎

河原町丸太町上ル町

龜屋 六右衛門

六十四歳斗

此六右衛門義相應ニ暮
居、仲間江年來出勤
仕、渡世御用筋相弁居
候へ共、只得夷而已ニ
而一体之取締方出來兼
候哉ト奉存候事。

上立賣小川東へ入町

平野屋 五郎兵衛

三十四五歳斗

此五郎兵衛義身上柄も
宜敷、相應之手代五六
人も有之候へ共、是迄

仲間間用駈ニ不相勤候
用向不案内ニ而一体之
取締方行届兼候哉ト奉
存候事。

高倉三条下ル町

伊勢屋 弥次郎

此弥次郎義幼少ニ而手
代嘉兵衛ト申者名代ニ
罷出居、定而右嘉兵衛
義乍名代相勤候義ト被
存候へ共、質屋一体之
肝煎役手代ニ而相勤候
義ハ不束之義ト被存候
事。

花屋町新町西入町

池田屋ふみ事

池田屋 徳兵衛

右者旧冬迄ふみ名前ニ
在之候処、俄ニ手代を

養子ニ相立徳兵衛ト相

改、如何敷風聞も有之、

不束之者へ肝煎役為相

勤候義ハ存外成事ニ被

存候事。

右之通ニ御座候。

今般有志之者共深く申談合、肝煎取締方人撰御願奉申上候もの左之通。

新シ町御池下ル町

八幡屋 弥兵衛

此弥兵衛儀跡相續人有之、手代四五人御座候

身上柄相應之暮居、尤

質仲ケ間之儀從來実意

を以セ話致來候之处、

一昨年頃セ話方相断当

時隠居同様之ものニ候事。

下立賣猪熊西入町

菱屋 惣兵衛

父 惣作

此惣作義當時隠居罷在相續人も有之、別家手代日勤致居、手代四五

人有之、身上柄相應ニ

暮居実意之ものニ有之

候事。

右之通御座候。以上。

(四)「永代式目録下書」(表紙)

永代式目事

一金五百疋 利足歩上御定書料、但シ旧業新業共一統

請取候事

一金五百疋 仲ケ間御取締被仰付候ニ付印札御定法書

料、但旧業新業共一統請取候事

一金百疋 質看板料、但シ旧業新業共受取候事

仲ヶ間御取解後組と江相加居商御取締被仰付候大仲

并組と江出金之事

一金五兩 大仲一統江振舞料

一金五兩 組内一統振舞料

右之通請取申候事

新加入出金之事

一金五百疋 印札料

一金五百疋 御取締御定法書并歩上御定書料

一金五百疋 大仲顔為見料

一金百疋 看板料

一金拾五兩 大仲一統振舞料

一金千疋 惣代挨拶

一銀拾匁 御掛御上役様江御挨拶

一銀七匁 同御下役様江御挨拶

一金毫朱 町代挨拶

一金毫朱 筆料

一 (空白) 御役所様江惣代出役方計并当差出候事

一金貳百疋 惣代一統江御酒料

新加入組内出金之事

一金拾兩 組内一統へ振舞料

一金毫兩 年番挨拶

一金三步 行事挨拶

一金三步 吹挙人挨拶

旧株譲受加入出金之事

一株料持主相對次第之事

但シ金七兩位金拾兩迄ニ而取扱可申事

一金五百疋 印札改料御定法書歩上ケ御定法書料

一金五百疋 大仲一統江顔為見料

一金五兩 大仲一統江振舞料

一金千疋 惣代一統江挨拶

一銀拾匁 御掛御上役様江御挨拶

一銀七匁 同御下役様江御挨拶

一金壹朱 町代挨拶

一金壹朱 筆料

(空白)

一 御役所様へ惣代出役之方計并当差出候事

一金貳百疋 惣代一統へ御酒料

組内出金之事

一金五両 組内一統へ振舞料

一金壹両 年番挨拶

一金三步 行事挨拶

一金三步 吹挙人挨拶

親類讓請出金之事

一金五百疋 印札改料御定法書歩上ケ御定法書料

一金五百疋 顔為見料

一金千疋 大仲一統へ振舞料

一金五百疋 惣代一統へ挨拶

一銀拾匁 御掛御上役様へ御挨拶

一銀七匁 同下役様へ御挨拶

一金壹朱 筆料

(空白)

一 御役所様へ惣代出役之方計并当差出候事

一金貳百疋 惣代一統江御酒料

一金貳百疋 相組江挨拶

組内出金之事

一金五百疋 組内一統振舞料

一金貳百疋 年番挨拶

一金百五拾疋 行事挨拶

一金百五拾疋 吹挙人挨拶

右親類讓之儀惣代より親類有無取調為證據一札讓受可申

候事

一家号替等之儀有之候得者惣代并近辺質屋より申談、得

与取調人鉢品菱等無之、全ク家号替而已之儀ニ在之候

得者年番為證據一札指入させ取計可申候。出金方則

左之通り。

一金貳百疋 印札改料

一金五百疋 大仲家号替披露料

一金三百疋	惣代一統江挨拶	代替跡目出金之事
一銀拾匁	御掛御上役様へ御挨拶	一金貳百疋 親より忤江目出度讓受跡目祝儀
一銀七匁	同御下役様へ御挨拶	一金百疋 忤江無餘儀讓受跡目祝儀
一金壹朱	町代挨拶	一金五百疋 親夫ハ勝手ニ付妻并幼少之者へ讓受跡目祝儀
一金壹朱 (壹匁)	筆料	祝儀
御役所様江惣代出役之方へ弁当計差出候 (ママ)	事	一金百疋 無據義ニ付女子讓受跡目祝儀
一金貳百疋	組内江家号替披露料	一金百疋 女子并幼少之者不勸料半季毎
一金百疋	年番挨拶	一金五拾疋 女子并幼少之者親夫名代不勸料、但シ半季毎
一金百疋	行事挨拶	都而名代為顔見料
一金貳百疋	相組江挨拶	組内代替跡目出金之事
組替出金之事		一金百疋 親ハ忤江目出度讓受跡目祝儀
一金百疋	印札改料	一金五拾疋 忤より親江無據義ニ付讓受跡目祝儀
一金五百疋	大仲間組替披露料	一金三百疋 親夫ハ勝手ニ付妻并幼少之もの讓請跡目祝儀
一金貳百疋	惣代一統挨拶	
一金貳両貳歩	組内顔為見披露料	一金五拾疋 無據義ニ付女子并幼少之もの讓受跡目祝儀
御役辺之儀者右ニ准シ取計可申事		義

一金百疋

女名前并幼少之もの不動料、但シ半季毎

一金五拾疋

女并幼少之もの親夫名代不動料、但シ半

季毎

一金百疋

都而名代為顔見料